

「何をするか」だけでなく「どのようにするか」

先日、友人と話をしている中で、興味深い話を聞きました。その友人は小さな町工場を経営している、いわゆる社長さんです。その話というのは……

「採用した二十歳の青年のあいさつはやたらと気持ちが伝わってくるんですよ。何でかなと観察していたら、三つのことに気付いたんです。一つ目は、必ず立ち止まって、体をこちらに向けるんです。顔だけじゃなく、体ごとです。二つ目は必ずこちらの目を探すんです。パソコンの画面などで私の顔が隠れていると、私と目を合わすために、目が合う位置まで自分が動くんです。三つ目は工場なので、いろんな大きな音もしているんですが、その状況によって声の大きさを調整するので、『今、あいさつはした。しかし、その声はよく聞こえなかった。』ということは今まで一度もありません。」

その青年のあいさつは、その時どきの自分本位の都合に合わせてしている形だけのあいさつではないということ。あいさつの仕方に正解がある訳ではありませんが、その青年にとって、相手に気持ちを届けるために、自分自身が納得しているあいさつの仕方なので、いつも変わらず同じように続けることができているということ。そして何より、人をつなぐ上で、「あいさつは大切なもの」という認識が根付いており、独りよがりにならず相手意識も大切にしていること。それらのことが合わさって「あいさつ」という一つの行為が繰り返されていること。

また、そこに至るまでの彼が積み重ねてきた経験も非常に興味深いものであり、年齢に関係なく人と為（な）りはその人の言動に垣間見えるものだとは再認識するとともに、その青年のことを「さすがだな。」と思わされました。

さて、今年度、学校経営計画の中でもお示ししているところである「指導の重点」の中のキーワードとして、「納得感」「自分と向き合う力」「やり抜く」などがあります。意識していないと日々の中に埋もれてしまうかもしれません、かと言って、そのキーワードだけ単体で取り上げても、「何に対して?」と言葉が宙に浮いてしまいます。そこで、一学期を振り返ってみましょう。日々の授業、自主学習、掃除、部活動や、園小中合同運動会等の行事もありました。例えば、学校生活や日常生活の中で、深く考えることなく、人から言われたことだけをやっているようでは「納得感」など味わえるはずもありません。特別な時だけそれらを踏まえてやっていくというものでもありません。日々繰り返される当たり前のことは必要・大切なので省かれていないもの。それらを自分の中でどのように受けとめ、情性にならず、謙虚に丁寧にできるかが肝心なポイントです。地味かもしれませんが、大切なことです。そして、日々繰り返される当たり前のことの精度を高めていくことは、自分を磨き高めていくことにつながるように思います。

湯原中の生徒たちがそれぞれの個性を生かしながら、自分らしい輝き方を知り、それぞれの輝きを放つことを願っています。